

ウランバートル市における障害者の社会参加促進プロジェクト(DPUB)

ニュースレター第11号 (2018年4月)

国連インターン 進路編

国連で働きたい日本人には、JPO(Junior Professional Officer)という制度があります。これは日本政府が給与を肩代わりし、国連で2年間働くというものです。私も一度この試験を受けましたが、残念ながら不合格でした。となると他の道は非常に限られるのですが、その前に、まず自分に実力も実績も足りないことがインターンを経験してよく分かりました。国連で働くには高度な英語はもちろん、関連分野で最低3年の職務経験が必要ですし、高い専門性も求められます。私の国際協力経験は、このインターンだけ。たった6ヶ月。しかも現場のことをまったく知らないし知識も足りない。だから自分に必要なことは、まず途上国の現場を知ること、そしてもっと勉強することだと気付かされました。それからネットで途上国で働ける仕事を探しました。そうしたら、日本のNGOがカンボジアで人を募集してましたこれだ、これしかない！！

直感でそう感じたものの、職務はダム建設が環境に与えるダメージの調査と提言。むむ、これはまったくの未経験。でも兎に角、応募だけはしないと可能性もないので、採択を願い応募してみました。(つづく)



DPUBチーフアドバイザー千葉寿夫

第2回DETファシリテーター養成講座、順調にスタート。(2018.4.12)



JICA久野専門員(右)

4月10日に開始した障害平等研修(DET)ファシリテーター養成講座は、今日で3日目。18名の参加者は、遅刻や欠席もなく、皆熱心に学んでいます。この学びをサポートするのは、6名のシニアファシリテーター。第一期生(2016年)の中から選ばれたリーダーとなる人達です。シニアのメンバーは、日本から来たJICA久野専門員の指導を受けながら、後輩達のサポートをしています。「朝早くから研修の準備、終了後も残ってミーティング、毎日ハードだけど、ステップアップするチャンス！」と意気込んだ様子です。今朝から「障害の社会モデル」の単元。この研修で一番の山場を迎えます。参加者全員が習得できるよう、シニア、プロジェクトスタッフ一同今日も頑張ります！



バガノール区を訪問しました (2018.03.29)

3月29日、障害平等研修(DET)ファシリテーターの4名と介助者がバガノール区を訪れました。バガノール区は、ウランバートル市の中心部から車で約2時間半かかる地区。今回は、ゲレルツェツェグさん(肢体不自由)とボロローさん(脳性マヒ)の二人がメインファシリテーターとして、区役所の職員向けに「障害とは？」や「私の行動」を考える参加型の研修を行いました。参加者は、ホロー(役場)の職員や警備員、清掃担当など様々。障害に対する関心も多様で、担当したファシリテーターは「どうやって進めて行こうか・・・」と悩んでいました。

開始当初、「3時間の研修は長すぎる！」と不満を口にしていた人達が、イラストやビデオを使ってグループワークを進めるうちに、「ホローに障害者専用の駐車スペースが必要」や、「手話はできないが、受付窓口紙とペンを置いて聴覚に障害がある人とコミュニケーションできるようにしよう」と一変。参加者の態度の変化にほっと安心。やりがいを感じたファシリテーター達でした。



「障害とは？」の考えを発表



JICA DPUBのFACEBOOKページに「いいね」をお願いします。

お陰様で、今ではページのいいねが1922件に達成し、より多くの方に情報を発信できるようになりました。これからも、楽しんでいただけるような投稿を目指して頑張ります。引き続き、宜しくお願い致します。

モンゴル国営放送 (MNB) から取材を受けました (2018.04.12)



障害平等研修ファシリテーター養成講座の様子と千葉チーフアドバイザーのインタビューが放送されました。ニュースは、こちらで視聴できますので、ぜひ御覧ください。(我々のニュースは35分からです)

<http://www.mnb.mn/j/139302>

「モンゴルでは障害者を支援するために、障害者を隔離してしまう傾向があります。

JICA「ウランバートル市における障害者の社会参加促進プロジェクト」は、日本の経験をモンゴルに紹介して欲しいという障害者の要望を受け、様々な研修を実施しています。モンゴルでは、障害者の為に、特別支援学校、特別病院さらに障害者用の入所施設などがあります。これらは悪いこととは言えませんが、障害者を社会から隔離するような環境を作ることは、適切ではないと国際的に言われています。しかしモンゴルでは、社会のインフラを整え、人々の態度を障害者に優しくするというよりも、障害者を隔離してしまう傾向があります。日本では、1990年頃から障害者の隔離政策ではなく、地域で暮らせるようにと政策が変更されてきました。その結果、障害者があまりバリアを感じず、社会に参加できるような環境整備が広がってきました。障害者を社会に参加させるためには、情報アクセシビリティやバリアフリーなインフラ整備など、社会環境を改善することが必要です。モンゴルには障害者権利法があるものの、その実施には多くの課題があると、多くの障害者は述べています。福祉サービスや助成金よりもっと大切なことは、バリアフリーな社会環境やコミュニケーション手段であり、障害者も平等に社会に参加できることです。」



ニュース番組のシーンから

DPUBプロジェクトの新アシスタント バトバヤルさんの紹介

我々のプロジェクトに新アシスタントとしてバトバヤルさんが加入しました。プロジェクトに入って初めて障害者に関して真剣に考えることが出来たと思います。自分でも今までどこかで無意識に障害者を社会から隔離する様な態度を見せていた気がしました。もっと社会の考え方、都市のインフラ、国の政策を少しずつでも改善し障害者に優しい環境にするために本プロジェクトの皆様と一緒に頑張りたいと思いますのでどうぞ宜しくお願いします。



29番学校 (聴覚障害者特別支援学校) 改善プロジェクト (2018.04.06)

先月、29番学校の先生と生徒さんがDPUBを訪問してくれました。学校のベルが生徒に伝わらず、授業の開始や終了、休み時間の始まりなどが分からない。日本ではどうしているのか?という質問を受けました。聴覚障害者学校では、通常、ベルとともにランプを使うことが多く。また様々な色分けもして生徒が分かりやすくしていると紹介しました。

ランプを使うことは、もちろん先生も生徒もご存知だったのですが、実際はどんなランプをどの様に使うのか、そこが大きな疑問でした。というのも、29番学校ではすでに生徒を中心にランプの取り付けプロジェクトを開始してました。いまひとつランプがあって、このランプがあれば、授業の開始が分かると好評でした。そこでもっと改善したいと考えていました。

そして昨日、改善プロジェクトの案をまとめたので助言が欲しいと言われ、29番学校を訪問しました。すると、先生や他の生徒を対象にプレゼンテーションがありました。ポスターにカラフルな改善案が提示され、先生の指導の下、生徒5名が協力して発表してくれました。生徒は3グループに分かれ、国際的にどんな機器があるのか、どんな情報を伝えられるのか、モンゴルにはどんな法律があるのか、など情報収集したそうです。また担当するトル先生によると、この改善プロジェクトの目的は、生徒が行政の政策に関わっていく、社会環境整備に関わっていくことで、自分たちが直面している問題を解決していく方法を学ぶことだと述べていました。

実はこのプロジェクト、社会問題を解決するためのコンテストに応募していて、発表が上手く行けば予算が獲得できるということです。ぜひ頑張って欲しいですね。私からは、皆さんの活動は社会全体の改善に繋がるので、聴覚障害者だけの問題と捉えず、学校改善、社会改善のつもりでコンテストに望んで欲しいと伝えました。



プレゼンする生徒達



Office: Government Building – 2, United Nation’s Street – 5, Ministry of Labor and Social Protection Ulaanbaatar – 15160, Mongolia

Facebook: <https://www.facebook.com/jicadpub>

Website: <https://www.jica.go.jp/project/mongolia/015/index.html>

E-mail: dpub.jica@gmail.com